ふりかえる 1

「知らない」ことを「調査」するのがフィールドワークではあるが……

小川 了
おがわ りょう / 東京外国語大学名誉教授、元AA研

**今になってやっと分かる、ということに気がつく。
知らずに「調査」したことを恥じても
もう取り返しはつかないのだが。**

畑を始めて初めて分かること

定年退職後、これはまったく幸運であったとしか言いようがないのだが、家の近くに畑地を借りられるという僥倖（ぎょうこう）に恵まれた。拙宅から上り坂にはなるが、自転車で10分ほどの地。もう何年も前からほったらかされていた土地で、丈の高い雑草が生い茂っていた。さっそく鍬（くわ）を入れ、雑草退治から始める。雑草の根元から大きなムカデが這い出してくる。ムカデは古い屋敷の天井裏などにいるものと思っていたが、地中に棲息するということを知ったのはこの時である。

荒地を鍬で掘り返し、耕し、畝らしきものを作り、どうやら畑らしいものにすることができた。なにしろ初めてのことであるから、畑入門の本に教えられるまま石灰をまき、マルチというビニール・シートもかぶせと、それらがどんな働きをするのか、なぜ有用なのか分からぬままにそうする。それなりに面積のある土地に何本もの畝（うね）を作り、あれもこれもと多種の作物の種をまき、苗を植えた。そうして一年目は特に肥料もやらずに野菜はとてもよくできたのである。

畑は簡単だ。種をまき、苗を植えれば、何でもできる。というわけで、友人諸氏に自慢めいた話をした。多くは感心してくれる。なかに、現役で大学で教えながら、畑どころか焼畑までやっているという人がおり、彼に意気高らかに話したところ、「うん、一年目は何でもよくできるんだ」と片づけられた。その一言で終わりである。そして、彼の言うとおり、二年目は一年目とは様相が大きく変わったのである。ナスなどひねくれた幹に日焼けしてぶざまなヤツが少しだけくっついている。野菜も日焼けするのか？　トマトなど簡単にできるはずのものが、そういかない。実がついても、ひび割れする。ニンジンに至っては芽が出そろわない。野菜作りは簡単ではない。

だいたいわたしはものごとを知らなさすぎた。タマネギはジャガイモと同じように地下にいくつもの実（タマネギ）をつけるのだと思っていたのである。驚くべき無知と言うしかない。しかし、畝をぜいたくに使ったおかげで巨大なタマネギができ、これでまたまた畑は簡単だと思った。ところが、大きすぎるタマネギはおいしくなかったのだ。ジャガイモについて言えば、種イモを植え付けてしばらくすると何本もの芽が出てくるが、そのうち一、二本を残して、他は摘み取る（「芽かき」

荒地状態だった畑。

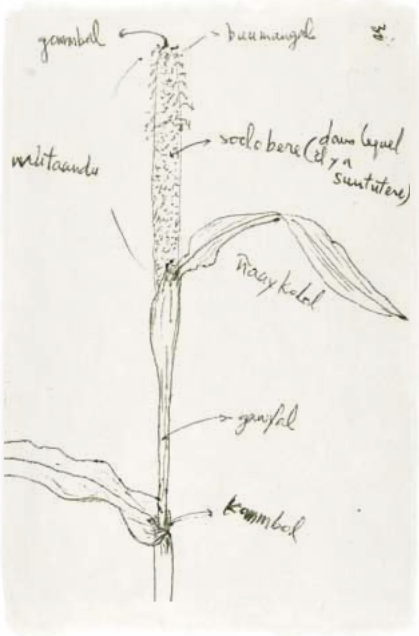
除草後、少し畑らしくなった。

一応、畑になった（左の2枚とは反対方向から）。

という)。地中のイモを引き抜かないように、左手で抑えるようにして、芽を引き抜く、と本にある。しかし、それでは土中のバイキンがイモに入るではないか。そこで、地表に出た芽を鋏(はさみ)で切り取った。すると、ジャガイモは全滅したのである。鋏の刃についた菌が芽の切り口から入るのだそうだ。

連作障害から始まり、肥料を好む作物、逆に肥料をやらない方がいい作物、作れば必ず虫にやられる野菜、夏の蚊やアブなどわたしを攻撃してくる虫、攻撃してはこないが出くわしただけで腰を抜かしそうになるヘビ、そして畑を全滅させたイノシシ……と、一年かかってやっと一つのことを学ぶ、その繰り返しである。ことはやってみないと分からない、ということを実感した。今もしている。

フルベの牧畜の村。



トウジンビエ(フィールドノートから)。

それでも、「調査」をしたこと

なぜ、こんなことを書くかというと、かくも無知であるわたしがアフリカのあの自然厳しき環境のもと、少雨に耐え、砂を含んだ風にさらされながら作物を作り、家畜を育てている人々の中で、厚かましくもあれこれと問い、「調査」をしていたからである。

わたしが滞在させてもらったのは西アフリカ、セネガル共和国のジョロフと呼ばれる半乾燥地域で、みずからを牛牧畜民として位置付け、その世界観も牛を中心に形成されているようなフルベの人々の村であった。アフリカ大陸の大砂漠地帯サハラ、そのサハラの南縁が西に出っ張った部分、大陸最西端に位置するセネガルの中央部から北西によった半砂漠状の乾燥域、一般にサヘルと呼ばれる降雨の少ない乾燥の地である。サヘル地域は大サハラ砂漠の南側に接するようにアフリカ大陸を東西に横切っているが、フルベの人々は東西3000キロ以上に及ぶこのサヘル地域の各地に分散している。言語はほぼ共通し、牛牧畜を重視する点でも共通している。セネガル・ジョロフ地方に暮らすフルベは定住村を形成し、牧畜だけではなく雨季の農耕もおこなっている。とはいえ、彼ら自身は自分たちをあくまでも牧畜民として位置付け、同地方で農耕を主としているウォロフの人々とは互いの生業の違いを利用する「もちつもたれつ」の関係にありながら、他方では土地利用をめぐって競合的な関係にある。

セネガル、フルベの村の畑。特徴ある長柄の除草具。

夏、雨季の間、フルベは自分たちが食べる穀物(トウジンビエ、ソルガム)を作ると同時に換金作物としての落花生を作る。わたしは落花生が地中にできる豆であることぐらいは知っていたが、それがどのようにマメを地中に作るのか知る由もなかった。落花生、つまり花を落として生きる豆という日本語が落花生の生態を踏まえた上で、まことに絶妙な表現で作られた語であることをフルベの村で暮らしてみて初めて知った。ましてやトウジンビエやソルガムに至っては見たことも、食べたこともなかった。トウジンビエは図に示すように細長い(40センチ以上にもなる)穂に小粒の実がつき、ソルガムのほうは少し大きめの粒が幾つにも分岐した穂につく。トウジンビエは播種(はしゅ)後3か月ぐらいで収穫可能だが、ソルガムは4か月ほどかかる。つまり、ソルガム栽培にはトウジンビエ栽培より多くの水(雨)が必要であり、ジョロフ地方での栽培はごく少ない。

雨の少ないサヘル地域にあっても雨季の畑には雑草が次々に生えてくる。セネガルの半乾燥地域には除草用具として大変特徴的なものがあり、フルベの人々はゴップと言うのだが、セネガルでは一般に「イレール」と呼ばれている。半月形というか、超音速ジェット機として知られたコンコルドに似た形の、幅20センチほどの鉄の刃をとても長い(3メートルほどもある)柄の先に取りつけたもので、人はこれを自分の胸あたりから前方に押し出すようにして表面土を耕す(写真を参照)。耕すというか雑草の根を切る。人は身をかがめる必要がなく、仕事が楽になる。除草だけではなく、垂直にもって播種用の小さな穴をあけるときにも使う。フランスが植民地化を始めた当初、ボルドー出身の商人イレール・モレル(Hilaire Maurel)という人が農具を売っていたことから、そこで売られていた農具が「イレール」としてセネガルに導入されたのだと言われることがあるが、は

家畜への水やりは重労働である。

放牧中の少年。

かつてセネガル歩兵だったSBK氏。

るかに早い時代（16世紀）の内陸探査記録（カダモストによる）にすでにこの農具の記述があることからしても、イレールはサヘルの一部地域に独特な農具であったことが分かる。こういった農具がもつ優秀さについてさえ、わたしはよく理解していなかったのだ。さらには牧畜についてのわたしの知識、これはもう本から得た初歩的な借り物でしかなかったのは言うまでもない。村に滞在し始めて、一から十まで教えてもらう身でありながら、それを「調査」と称するとは今から思うと「厚顔無恥」という言葉が身に沁みる。

取り返しがつかないということ

もう一つある。退職してのち、現地セネガルに容易には行けなくなったこととも関連するのだが、自分で実際に目にし、話を聞いて学ぶというより、一次、あるいは二次資料など書かれた資史料に頼って仕事というか勉強することが増えた。そういうことの一つとして「セネガル歩兵」ないしは「セネガル狙撃兵」と呼ばれ、宗主国フランスが戦った戦争に駆り出された西アフリカの広い地域からの若者たちのことがある。セネガル歩兵は19世紀半ばという早い時期から存在したのだが、大量に動員されるようになったのは第一次大戦時である。20世紀初頭の西アフリカ、自動車はおろか、靴というものさえ見たことがなかったであろう、アフリカの村々で日々を過ごしていた青年たちが、否応なく駆り（狩り）出され、銃を持たされ、ヨーロッパでの激戦の前線に立たされた。第一次大戦が終わった後、第二次大戦でも、またベトナムやスエズでの戦いにおいても、つまりフランスが海外で戦った戦争にも動員されている。

じつは、わたしが初めてセネガルの村に赴く前、ダーラという小さな町で何日かを過ごしたとき、見ず知らずのわたしを泊めてくれ、何くれとなく世話をしてくれた一家の主がかつてはセネガル歩兵だったのである。そのことを今になってわたしは深く理解するが、当時のわたしはなんと愚かなことよ、よく知ることもなく、したがって詳しい話を聞くこともないままに過ごしてしまったのである。いかにも気の強い奥さんに押され気味のお人好しそのもの、孫の面倒を見るのが楽しみという感じの人であった。当初、わたしが彼らの食べ物を食べられるかととても気にしていた。それも今思えば、彼がヨーロッパ生活を経験しており、ヨーロッパ人が自分たちとは異なった食べ物を食べるのを実見していたからこそであろう。ある日、写真を撮ってほしいと言い、家の中に引っ込み、しばらくして外に出てくるとカーキ色の軍服に身を固めた誇らしげな姿の彼であった。もちろん、第二次大戦時に動員されたのであろう。軍隊の上官（フランス人）から言われる命令口調を何度も真似して、思い出し笑いをしていた。「前え一進め」という掛け声のフランス語をよく覚えていて何度も繰り返していた。そしてどういうわけか、さかんに「カプート」という語を口にしていた。あきらかにフランス語ではないこの「カプート」なる語はドイツ語と思われる。ドイツ兵の捕虜収容所で勤務していたセネガル歩兵もいるから、あるいはそういった関係の任務に就いていたのかもしれない。その元セネガル歩兵も亡くなって久しい。

愚かと言うより申し訳ないと言うべきであるが、わたしはその時に撮った軍服姿の彼の写真のネガを失っている。振り返ると自らの愚かさばかりが押し寄せる。